

### (3) インターンシップ

2009年度も、2008年度に引き続き、工学部の全学科でインターンシップが実施された。希望者数と派遣者数を表1に示す。合計欄の括弧書きの数値は、参考のために2008年度の希望者数と派遣者数を示したものである。今年度は、学科によって多少の違いがあるが、全体として希望者数・派遣者数共、昨年度に比べて減少している。学科ごとに見ると、物質生命化学科とマテリアル工学科は横ばいないし微増、機械システム工学科、社会環境工学科、建築学科、および情報電気電子工学科はかなりの減少、数理工学科はほぼ倍増であった。情報電気電子工学科については、希望者および派遣者が半減したことと、学科規模に比べて希望者が少ないことが目立つ。一方、数理情報システム工学科の希望者数は倍増しており、同学科のインターンシップへの取組が成果を上げつつあるものと評価できる。

表2は、各学科が授業科目として単位認定しているインターンシップ科目の一覧である。インターンシップに参加し、各学科で定めた条件を満足した学生には、これらの科目の単位が認定される。

インターンシップの実施時期は、各学科とも夏季休業中で8月20日前後から2週間ないし1ヶ月程度の間であり、受け入れ先の職員に準じた就業条件であった。また、就業規則の遵守と機密保持が要求され、参加学生は全員、傷害保険等に加入して実施中の事故等への対応をした。

各学科の担当教員が企業等へ実習の申込みを行い、学生はそれらの中から自分の希望に従って企業等を選択し、更に実習受入れ先の指導により、製品の研究開発や生産現場での業務に従事した。また、最近の傾向として、企業等が公募型のインターンシップを準備し、インターネットなどを通じて全国の学生に呼びかけ、応募者の中から企業等が参加者を選抜する方式が目立ってきた。公募型のインターンシップは今後ますます増えると予想されるので、工学部としても対応すべきであろう。

各系学科では、インターンシップの前後に官庁や民間企業から講師を招き、表3に示すような講演会を実施している。インターンシップの評価方法としては、レポート提出や実施報告書提出及び業務日誌等で行った。一部の学科では2年生にも実施状況の発表会を聴講させ、次年度に向けての心構えをさせており、インターンシップに参加した学生は、自己の職業適性や人間関係について考える絶好の機会となり、将来の職業選択について高い視点が養成される効果もでてきた。また、安全工学を受講することも事前教育の一環として利用してもらうことができたようである。

表1 2009年度 工学部インターンシップ実績表 ( )は2008年度の数

学 科 名	希望者数		派遣者数		合 計	
	男	女	男	女	希望者数	派遣者数
物質生命化学科	18	19	18	19	37(30)	37(34)
マテリアル工学科	23	5	21	5	28(33)	26(28)
機械システム工学科	44	2	44	2	46(69)	46(66)
社会環境工学科	45	12	33	11	57(73)	44(69)
建築学科	20	16	20	16	36(59)	36(56)
情報電気電子工学科	21	5	21	5	26(45)	26(53)
数理工学科	4	4	2	4	8(4)	6(4)
合 計	173	63	159	62	238(313)	221(310)

表2 2009年度 各系学科ごとのインターンシップの授業科目

学 科 名	授業科目名	必修・選択科目	単 位 数
物質生命化学科	化学学外実習	選択	2
マテリアル工学科	マテリアル工学応用セミナー	選択	2
機械システム工学科	機械システム応用セミナー	選択	2
社会環境工学科	インターンシップ	選択必修	1
建築学科	インターンシップ	選択	2
情報電気電子工学科	インターンシップ第一	選択	1
	インターンシップ第二	選択	1
	情報と職業	選択	2
数理工学科	インターンシップ	選択	2

表3 2009年度 工学部インターンシップ特別講演実施状況

学 科 名	講 師 名	会 社 名
機械システム工学科	脇田 浩一	アイシン九州株式会社
マテリアル工学科	坂井 滋	熊本県産業技術顧問 兼 日産自動車技術顧問
社会環境工学科	松山 公年	日本工営株式会社
情報電気電子工学科	小畑 仁	トヨタテクニカルデベロップメント